

伊勢物語と大和物語

大井田 晴彦

はじめに

『伊勢物語』と『大和物語』、ほぼ同時代に成立した歌物語であり、話柄や主題の類似する段は多い。その一方で、際立った相違を示すことも少なくない。『伊勢』が在原業平を彷彿させる「男」の一代記的体裁を持つのに対し、『大和』は作品を統括する主人公を持たず、各人物が固有名で語られる。『伊勢』では作品を統括する主人公であった男は、『大和』では歌人の群像の一人として登場する。この違いは、両者の本質に関わって重要であろう。両物語に共通する章段を比較することで、『伊勢』『大和』それぞれの固有の論理と方法を明らかにできよう。^{〔1〕}概して『大和』が先行する『伊勢』を取り込んでいるようだが、そのまま引用するのはなく、大幅に文章を改めている場合も少なくない。『伊勢』を強く意識しながら、新たな物語を生み出すべく模索しているようにも思われる。『大和』ならではの独自性を見極めたい。

有名な『伊勢』二十三段を取り上げることから始めよう。長大なこの段は、内容から三つの部分に分けることができる。

伊勢物語と大和物語（大井田）

〔I〕「田舎わたらひしける人の子ども」が、互いに幼な恋を育んでいた。成人した男は「筒井つの井筒にかけしまろが丈過ぎにけらしな妹見ざるまに」の歌を贈って求婚する。女は「比べこし振り分け髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき」と了承した。

〔II〕妻の親が亡くなり、生計のあてがなくなると、男は高安の女に通い出す。不満も顔に出さずに自分を送り出す妻を邪推した男が前裁に隠れて様子を窺っていると、化粧した妻が「風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君が一人越ゆらむ」と夫の身を案ずる歌を詠む。妻の思いに心動かされた男は、高安に行かなくなつた。

〔III〕久しぶりに高安の女を訪ねるが、「笥子の器物」に自ら飯を盛るといふ、すっかり打ち解けた態度に男は嫌気がさす。高安の女は「君があたり見つつををらむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも」「君来むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経る」という哀切な歌を詠むけれども、男は二度と通って来ない。

「風吹けば…」の歌は『古今集』雑下（九九四）に、長大な左

註をもつて載る。龍田山にまつわる古くからの歌語り、伝承歌だったのだろう。この話と共通するのが、『大和』百四十九段であるが、(II)(III)のみで、(I)の部分は見られない。(I)は、夫の旅の安全と早い帰宅を願う、行商人の妻を描いた李白『長干行』の翻案とされるが、これが奏功して夫婦の育んできた時間の重みが印象づけられた。何よりも大きな違いは、『大和』では、「風吹けば…」の一首のみしか和歌がない点である。満足に歌も詠めぬ高安の女は、男に棄てられて当然、という態度である。優れた詠歌によって夫の愛情を取り戻す、歌德的説話の趣をこれらの話は有している⁽³⁾。しかし、『伊勢』では、高安の女は二首の歌をもつても男の愛情を回復できなかった。(III)では、(II)の歌徳説話的な発想を相対化し、歌の無力を語っている。『伊勢』の複眼的で覚めた物の見方が窺えるのである。『大和』には、そうした視点は無い。ひたすら高安の女を貶めるのみである。また、文体も大いに異なる。簡潔で読者の想像に委ねる『伊勢』に対し、「この今の妻は、富みたる女になむありける」「心地には限りなくねたく心憂く思ふを、忍ぶるになむありける」「この今の妻の家は、龍田山越えて行く道になむありける」などと、『大和』には冗長な説明が目立つ。さらには「金椀に水を入れて、胸になむ据ゑたりける…この水熱湯にたぎりぬれば、湯捨てつ」という荒唐無稽な描写も奇異な印象を与える。

登場人物の実名を挙げる『大和』にあって、百四十九段は、未

尾に「この男はおほきみなりけり」と業平をほのめかすのみで、名は明示されない。「田舎わたらひしける人の子ども」(伊勢)との辻褃合わせに腐心しているのである。

一

『大和物語』に「在中将」業平の名が見える段は、百四十三・百四十四・百六十・百六十六段の九段である。業平の名声と力量に応じた待遇といえよう。このうち百四十三・百四十四段は在次の君(滋春)を主人公とする段だが、「在中将のみむすこ在次の君」「在中将の東にいきたりけるけにやあらむ、この子どもも、人の国に通ひをなむ、時々しける」などと、父業平を強く意識した語り口となっている。百四十三段は、在次が密かに通っていた五条の御が、「我のみと思」っていたのに、実は在次の兄たちとも通じていたという話である。「我のみと思」っていた女が実は多情だったという話は、『伊勢』四十三段に類話がある。また在次の歌「忘れなむと思ふ心の悲しきは憂きも憂からぬものにぞありける」は、『伊勢』二十一段の「忘るらむと思ふ心のうたがひにありしよりけにものぞ悲しき」に似ている。続く百四十四段は、在次の東下りを語る。「わたつうみと人や見るらむ逢ふことのみみだをふさ(小聡)に泣きつめつれば」「いつはとはわかぬどたえて秋の夜ぞみのわ(箕輪)びしきは知りまさりける」と、

訪れた土地の名を、好んで折句に詠み込んでいる。この段の後半は、以下の通りである。

かくて、人の国歩き歩いて、甲斐の国にいたりてすみける
ほかに、病して死ぬとて 詠みたりける、

かりそめのゆきかひぢ（甲斐路）とぞ思ひしを今は限り
の門出なりける

と詠みてなむ死にける。この在次君の一所に具して知りたりける人、三河の国より上るとて、この駅どもに宿りて、この歌どもを見て、手は見知りたりければ見つけて、いとあはれと思ひけり。

「かりそめの…」の歌は、『古今集』哀傷の巻末歌（八六二）。「甲斐の国にあひ知りてはべりける人とぶらはむとてまかりけるを、道中にてはかに病をして、いまいとまとなりければ、詠みて、「京にまかりて母に見せよ」と言ひて、人につけてはべりける歌」という長い詞書がある。この直前に位置するのが、「病して弱くなりける時詠める」の詞書を持つ「つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」の業平の辞世の歌（『伊勢』百二十五段にも）である。ともに人生を道にたとえ、唐突な死の訪れに驚愕するという詠みぶりが共通する。意図的な配列といえよう。『大和』には、ことさらに「三河の国」の名が見えるが、『伊勢』九段を意識したものに違いあるまい。在次を主人公としていても、父業平を強く意識し、『伊勢』を前提としている

ことが知られるのである。

二

『大和』百六十段から百六十六段までの七章段は、業平を主人公とする。『伊勢』にも共通する話題が多いが、『大和』独自のものもある。複雑な『伊勢』の成立の問題はそれとして、概ね『大和』は『伊勢』を典拠としているようである。しかも『伊勢』の多くの章段から恣意的ではなく、一定の基準によって選抜しているらしい。東下り・斎宮・惟喬親王に関する段は一切採られていない。『伊勢』の重要な一側面、男同士の友情を語る段も全く見られない。森本茂氏は、「(1) 在中将と後宮の女との話に限る」「(2) 第一部の歌材と同じか、それに近い内容の歌を選ぶ」とするが（大和物語全釈）、首肯すべき見解だろう。

次の百六十段は、『伊勢』に共通する段を持たない。

同じ内侍に、在中将すみける時、中将のもとに詠みてやりける、

秋萩を色どる風の吹きぬれば人の心もうたがはれけり
とありければ、

秋の野を色どる風は吹きぬとも心はかれじ草木ならねばとなむいへりける。かくてすまずなりて後、中将のもとより、衣をなむ、しにおこせたる。それに、「洗はひなどする

人なくて、いとわびしくなむある。なほ必ずしてたまへ」となむありければ、内侍、「御心もてあることにこそはあなれ。

大幣になりぬる人の悲しきはよるせもなくしかぞなくなら

となむ言ひやりける。中将、

なかるとも何とか見えむ手に取りて引きけむ人ぞ幣と知るらむ

となむ言ひける。

「秋萩を…」と「秋の野を」の贈答は、「女のもとより七月ばかりに言ひおこせてはべりける 詠み人知らず」「返し 在原業平朝臣」として『後撰集』秋上(二二三・二二四)に載る。また『在中将集』『雅平本業平集』にも載るが、両『業平集』は『大和』から採歌したのだろう。この女を『大和』は、「同じ内侍」すなわち直前の百五十九段に登場した染殿の内侍とする。百五十九段は、内侍に通っていた右大臣源能有が、多くの衣類の染色を依頼するという話である。内侍について、藤原良相女(拾穂抄)・藤原因香(虚静抄)・藤原長良女有子(雨海博洋氏)⁵⁾などの説があるが、未詳である。あるいは架空の人物かも知れない。『伊勢』本文には登場しないが、中世の冷泉家流古注にその名が見える。すなわち、二十二・九十四・九十九段の「女」が、染殿内侍に該当するのであり、さらには滋春(在次)の母であるともいう。かかる理解の生じた背景については、木戸久二子氏の論に詳しい。⁶⁾

後半は、在五中将が通わなくなつてから、厚かましくも衣の仕立てを依頼してきたという話で、内侍が裁縫や染色の上手であるという前段を踏まえている。『勢語臆断』や『伊勢物語古意』は、『伊勢』九十四段との類似を指摘する。新しい夫を持ったもの妻に、男が絵を送つてくれるよう依頼する話で、女を染殿内侍とする冷泉家古注の根拠ともなっている。が、より近似するのは、『大和』二十七段である。出家した「かいせう(戒仙)」が、親のもとに洗い物を送つて疎まれるという話だが、この戒仙とは、在原棟梁の子、すなわち業平の孫である。人物・出来事ともに百六十段と密接な関係にあるといえよう。ここで「衣をなむ、しにおこせたる」という記述にもう少し拘りたい。『伊勢』十六段では、家を出た有常の妻のために、男は「夜の物までおく」つてやった。有常は「これやこのあまの羽衣うべしこそ君がみけしとたてまつりけれ」とその厚志に感涙した。また、四十一段では袍を破損して困っている義妹夫婦のもとに「いと清らなる緑衫の袍を見出でてや」つた。このように『伊勢』の主人公には、困窮する親族に衣服を贈る、温情の持ち主という印象がある。『大和』では、それをずらし、図々しくも衣を寄越してくる男へと、

「大幣に…」と「なかるとも…」の贈答は、やはり『伊勢』には見えない。両『業平集』には、「なかるとも…」の歌のみが載る。この贈答は、次の『伊勢』四十七段を踏まえた『大和』の創

作であろう。

昔、男、ねむごろに、いかでと思ふ女ありけり。されどこ

の男をあだなりと聞きて、つれなきのみまさりつつ言へる、

大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざり

けれ

返し、男、

大幣と名にこそ立てれながれてもつひによるせはありと

いふものを

『古今集』恋四（七〇六・七〇七）にも「ある女の、業平朝臣を

所定めず歩きと思ひて、詠みてつかはしける 詠み人知らず」

「返し 業平朝臣」として載る。『大和』百六十段の「大幣の…」

は、大幣のように多くの女性の引く手あまたのあなたの気の毒な

ことは、女たちに捨てられて寄る瀬もなく、このように、鹿が妻

を恋うように泣いていることです、の意。「秋萩」の連想から

「鹿」を詠み込んだ。中将の返歌「なかるとも…」は、「なかる」

に「泣かる」と「流る」を掛ける。幣を手にとって引いた人、私

と深い仲になったあなたこそ、私の気持ちをわかってくださるで

しょう、の意。この二首は、『伊勢』の贈答歌の鍵語を踏まえた

ながら、単なる模倣、二番煎じではない、独自の創作を試みている

のである。

三

続いて『大和』百六十一段を取り上げよう。この段から、業平

と二条后高子の恋が語られることになる。

在中将、二条の後の宮、まだ帝にも仕うまつりたまはで、

ただ人におはしましける世に、よばひたてまつりける時、ひ

じきといふ物をおこせて、かくなむ、

思ひあらば葎の宿に寝もしなむひじきものには袖をしつ

つも

となむのたまへりける。返しを人なむ忘れにける。

さて、後の宮、春宮の女御と聞こえて大原野にまうでたま

ひけり。御供に上達部・殿上人、いと多く仕うまつりけり。

在中将も仕うまつりけり。御車のあたりに、なま暗き折に立

てりけり。御社にて、おほかたの人々祿たまはりて後なりけ

り。御車のしりより、奉れる御単衣の御衣をかげさせたま

へりけり。在中将、たまはるままに、

大原や小塩の山も今日こそは神代のことを思ひ出づらめ

と忍びやかに言ひけり。昔を思し出でて、をかしと思しけ

る。

本段は、『伊勢物語』三段および七十六段を組み合わせ、文章を

改変することで成立したと考えられる。有名な四、五、六段、あ

るいは最も長大な六十五段でなく、二条后章段の発端と末尾に位

置する二章段を、『大和』は選び取った。

『伊勢』三段は次の通りである。

昔、男ありけり。懸想じける女のもとに、ひじき藻といふものをやるとて、

思ひあらば律の宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも

二条の後の、まだ帝にも仕うまつりたまはで、ただ人におはしましける時のことなり。

文章の類似から、書承関係は明らかであろう。しかし、両者の間には決定的な相違がある。「思ひあらば……」の詠者が『伊勢』では男であるのに対し、『大和』では二条后となっている。もつとも、『大和』の注釈書の多くは、男の詠歌とする。しかし、敬語の用法からみて、二条后とすべきである⁽⁷⁾。詠みぶりからしても女歌とするのが妥当である。この歌が、本来は、女の歌であったとする折口信夫『伊勢物語』(ノート編)の指摘も想起される。『大和』が後の歌とするのは、『伊勢』を誤読したのではなく、独自の読み換えと見るべきだろう。すなわち、業平に積極的、挑発的に、歌を詠み掛ける色好みの女として二条后を造型しているのである⁽⁸⁾。『伊勢』において高子の詠歌は、六十五段に「あまの刈る藻にすむ虫のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ」「さりとともと思ふらむこそ悲しけれあるにもあらぬ身を知らずして」という二首を数えるのみである。ともに我が身の拙さを悲嘆する独詠

である。いったい『伊勢』においては、二条後の内面に立ち入った叙述は少なく、その人物像は鮮明でない。もっぱら男の一念な恋、憧憬の対象として語られるのみであり、男の情熱に翻弄される受身の存在にとどまる。むしろ『大和』のほうが、主体的に男に恋を仕掛ける后として、精彩豊かに描いているといえよう。

昔、二条の後の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうでたまひけるに、近衛府にさぶらひける翁、人々の禄たまはるついでに、御車よりたまはりて、詠みて奉りける、

大原や小塩の山も今日こそは神代のことと思ひ出づらめとて、心にも悲しとや思ひけむ、いかが思ひけむ、知らずかし。

『大和』百六十一段の後半部は、右の『伊勢』七十六段を改変・付加したものと考えられ、やはり顕著な相違がある。『伊勢』では、翁が衆人を前に、藤氏の繁栄を寿ぐ歌を奉るのに対し、『大和』では後に「忍びやか」に詠みかけている。『大和』では后が「奉れる御単衣の御衣をかげさせ」たと、色めかしい叙述が付け加えられる。『伊勢』では、男の悲しみを語り手が推測するが、『大和』では后が「昔を思し出でて、をかしと思」ったとある。後の態度には、恋愛を趣味的に愉しむ、余裕めいたものさえ感じられよう。このように、本段では、業平よりも后に焦点が当てられている。『伊勢』の二章段を単純に並べたものではなく、後の人物像の据え直しが試みられているのである。

四

続く百六十二段も、二条后との交渉を語る段である。

また、在中将、内裏にさぶらふに、御息所の御方より、忘れ草をなむ、「これは何かといふ」とてたまへりければ、中将、

忘れ草生ふる野辺とは見るらめどこはしのぶなり後も頼

まむ

となむありける。同じ草をしのぶ草、忘れ草といへば、それによりなむ、詠みたりける。

御息所、すなわち二条后から忘れ草が贈られてきた。男の冷淡さを詰っているのである。中将は、「こはしのぶなり（人目を忍び、あなたを恋い偲んでいるのです）」と強引に開き直り、これからも頼りにしましょう、と言つてのけた。ほぼ同じ話が、『伊勢』百段である。

昔、男、後涼殿のはさまを渡りければ、あるやむごとなき人の御局より、忘れ草を、「しのぶ草とやいふ」とて、出ださせたまへば、たまはりて、

忘れ草生ふる野辺とは見るらめどこはしのぶなり後も頼

まむ

『伊勢』三十一段にも「ある御達の局の前」で男が「忘れ草」を詠んだという話があり、関連があろう。『伊勢』の「あるやむご

となき人」を二条后として、『大和』は物語に取り込んでいる。

『大和』末尾の「同じ草をしのぶ草、忘れ草といへば」とは、『伊勢』の「忘れ草を、忍ぶ草とや言ふ」を会話文と解したことから生じた誤解であり、やはり両物語の書承関係を示している。

在中将に、後の宮より菊を召しければ、奉りけるついでに、

植ゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ
枯れめや

と書いつけて奉りける。

（百六十三段）

『伊勢』五十一段に「昔、男、人の前裁に、菊植ゑけるに」、『古今集』秋上（二六八）詞書に「人の前裁に、菊に結びつけて植ゑける歌 在原業平朝臣」とあり、具体的な相手は定かでない。中国伝来の菊は、不老長寿の霊薬と考えられていた。その菊を贈ることで、後の末長い栄えを祈るのである。「植ゑし植ゑば」の同語反復による強調、「秋なき時」という奇抜な仮定表現、「咲かざらむ」「散らめ」「枯れめ」など慶祝にそぐわない言葉を畳みかける大胆な口調など、いかにも業平らしい詠みぶりである。この話が二条后に関わるものとして『大和』に取り込まれたのは、「根さへ枯れめや」の表現に、昔と変わることはない、男の密やかな恋心を読み取ったからであろう。また、これは「寝さへ離れめや」を掛けていよう。⁹とすれば百六十一段の後の歌の「葎の宿に寝もしなむ」と呼応していることになる。

在中将のもとに、人の飾り粽をおこせたりける返り事に、
かく言ひやりける、

あやめ刈り君は沼にぞまどひける我は野に出でて狩るぞ
わびしき

とて、雉をなむやりける。(百六十四段)

『伊勢』五十二段に「昔、男ありけり。人のもとより、飾り粽をおこせたりける返り事に、あやめ刈り君は沼にぞまどひける我は野に出でて狩るぞわびしき」とて、雉をなむやりける」とあり、ほぼ同文である。前段同様、折りにふさわしい贈り物を話題とした段である。連続する『伊勢』の二章段が、あまり手を加えられず、そのまま取り込まれたのだろう。そのためか、相手が判然としない結果となった。男か女であるかもわからない。二条后と解するのは、敬語が無いことから躊躇される。編者の不手際が露呈した例である。

二条后の登場する段は以上になるが、『大和』十八段および十九段には、「故式部卿の宮（敦慶親王あるいは敦実親王か）」が「二条の御息所」という女性に通っていたものの、途絶えがちになった、とある。この女性を高子とするのは、年齢的に問題があることから、伊勢とする説（森本『全釈』）や、「三条の御息所（三条右大臣定方女能子）」の誤りとする説（南波浩『全書』・高橋正治『全集』・柿本奨『大和物語の註釈と研究』など）がある。一方、『大和』の歌語的性格を重視する雨海氏は、有名な

色好みの親王と高子を結びつけた虚構であるとした。¹⁰⁾ 傾聴すべき指摘である。

『大和』の在中将章段において二条后が重視されるのは、彼女の子孫たちとの関わりによるところも大きい。陽成院とその皇子たち、元良親王（二宮・故兵部卿宮）、元平親王（二の皇子・彈正の皇子）、源清蔭（源大納言の君）らが活躍する段は多い。彼ら色好みの皇子たちの祖として高子は想起され、物語に位置づけられているのではないか。

五

百六十五段は、業平の死を語る段である。

水尾の帝の御時、左大弁のむすめ、弁の御息所としていますかりけるを、帝御髪下ろしたまうて後にひとりいますかりけるを、在中将忍びて通ひけり。中将、病いと重くしてわづらひけるを、もとの妻どももあり、これはいと忍びてあることなれば、えいきもとぶらひたまはず、忍び忍びになむとぶらひけること日々にありけり。さるに、とはぬ日なむありけるに、病いと重りて、その日になりけり。中将のもとより、つれづれといとど心のわびしきに今日はとはずて暮らしてむとや

とておこせたりけり。「弱くなりたり」とて、いといたく

泣き騒ぎで、返り事などもせむとするほどに、「死にけり」と聞きて、いとみじかりけり。死なむとすること、今々となりて詠みたりける、

つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを

と詠みてなむ絶え果てにける。

染殿の内侍と二条后高子に続き、第三の女、弁の御息所との関係が語られる。「左大弁」は、左中弁藤原良近説（大和物語鈔）、百五十九段に登場した右大弁源能有説（森本茂『大和物語全釈』）などもあるが、該当する人物はなく、未詳である。あるいは架空の人物か。この御息所と「つれづれと…」の詠歌は両『業平集』には見えるが、やはり『大和』から採られたのであろう。前半部は『伊勢物語』にない、『大和』独自のものである。水尾の帝（清和）の出家に乗じて御息所に通うという振る舞いは、『源氏物語』「若菜」上で、朱雀院の出家後に源氏と朧月夜が密会した、という話に通ずるものがある。在中将は、二条后に続いて、水尾の帝の寵妃と関係を持ったことになる。『伊勢』の后妃というと、直ちに二条后が想起される。「我よりはまさりたる人」（八十九段）、「いとになき人」（九十三段）、「やむごとなき女」（百十一段）なども、二条后として理解しがちである。しかし、在中将が求愛するのは、二条后にとどまらない、多くの后に恋を仕掛ける男として『大和』は語ろうとする。後半部は、『伊勢』百二十五

段によっている。この最終段の前に位置する百二十四段と続けて引用しよう。

昔、男、いかなりけることを思ひける折にか、詠める、

思ふこと言はでぞただにやみぬべき我としき人しなれば

昔、男、わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、

つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを

「思ふこと」とは、これまでの人生を通じて、心に去来するさまざまな感慨をいう。それを「言はで」とは、すなわち詠歌を断念、放棄することに他ならない。いったい、『伊勢』の男にとつて和歌とは何であったか。都市化により血縁的・地縁的共同体は崩壊し、人と人の断絶は深刻なものとなった。人々の絆を回復すべく和歌の力が要請されてくるのである。『伊勢』は、和歌の力の高らかな宣言から始発した。しかし、物語の進行につれ、多くの人々と和歌を詠み交わしているうちに、男はその無力を思い知らされる。「我としき人しなれば」、結局人と人は理解し得ない、という諦念に到るのである。こうした失意と絶望のうちに男は死を迎えることになる。「つひにゆく…」の歌は、死に直面した驚きを率直に詠んだものであり、これといった技巧も認められないが、「今日明日」でなく「昨日今日」としたところに眼目がある。目前に迫った死から逃れることもできず、自らの人生を

顧みる余裕さえもない。百二十四段で詠歌を断念していても、死という人生最大の局面では歌を詠まずにはいられない、ここに「みやび」に染まりきった男の姿を見る。しかも、百二十四・百二十五段がともに、独詠であることに注意される。男の詠歌を受け止め、応えてくれる者は誰もいない。にもかかわらず男は、自らの感慨を歌に託せずにはいられないのである。

かくして、『伊勢』では、男は孤独のうちに世を去ることとなる。対して『大和』では、弁の御息所のみならず、多くの「もとの妻ども」の存在も語られる。病に臥してから死に到るまでの経緯が、言葉を費やして詳細に語られるのである。散文を切り詰め、和歌へと収斂してゆく『伊勢』と、話題を肥大化させてゆく『大和』の、語りの姿勢はきわめて対蹠的である。『大和』は、染殿の内侍や弁の御息所といった独自の女性を登場させるように、詠歌そのものよりも、むしろ在中将の多岐にわたる女性関係に関心があるらしい。『大和』における在中将は、多くの女性たちから、その死を哀悼されるのである。¹⁾

六

在中将章段は、中将の死をもって終わるのではない。さらに次の段が続く。

在中将、物見に出でて、女のよしある車のもとに立ちぬ。

下簾のはさまより、この女の顔いとよく見てけり。ものなど言ひかはしけり。これもかれも帰りて、朝に詠みてやりける、

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮らさむ

とあれば、女、返し、

見も見ずも誰と知りてか恋ひらるるおぼつかなみの今日のながめや

とぞ言へりける。これらは物語にて世にあることどもなり。

(百六十六段)

既に死を語っておきながら在中将の話題を取り上げるのは不可解だが、回想あるいは補遺として付け加えられた段であろうか。前段の贈答では「今日」が共通する鍵語となっていたが、その連想から取り込まれたのかもしれない。前段の「つれづれと…」と、この段の「見も見ずも…」の歌は、詞と発想においてよく似通う。やはり一連の章段と同様、高貴な女性との風流な歌の贈答を語っている。この段は、『伊勢』九十九段を踏まえ、改作したものである。末尾に「これらは物語にて世にあることども」とあるが、『伊勢』をさすのか、流布していた歌語りをさすのか、あるいは両者を含んでいるのか、よくわからない。

昔、右近の馬場のひをりの日、向かひに立てたりける車に、女の顔の、下簾より、ほのかに見えければ、中将なりけ

る男の詠みてやりける、

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やなが
め暮らさむ

返し、

知る知らぬ何かあやなくわきて言はむ思ひのみこそしる
べなりけれ

後は、誰と知りにけり。

『古今集』恋一（四七六・四七七）もほぼ同じである。『伊勢』では「女の顔の、下簾より、ほのかに見えければ」とあるのが、『大和』では「下簾のはさまより、この女の顔いとよく見てけり」とあり、大きく異なる。『大和』の在中将は、女的美貌を確認したうえで、厚かましくも「見ずもあらず見もせぬ…」と詠んだことになる。『伊勢』では、女に即座に歌を詠み贈ったようだが、『大和』では翌朝に贈ったとしている。一途に恋へと突き進んでゆく、若々しい青年を思わせる『伊勢』に対し、『大和』の在中将は、恋に手慣れた色好みといった印象がある。さらに女の返歌が、まったく別の歌となっているのが注意される。『伊勢』は、贈歌の「見ずもあらず見もせぬ」を「知る知らぬ」と同じ構文で応じ、「思ひ」の「灯」だけが道しるべであると挑発的な詠みぶりであるが、『大和』では、贈歌に密着した表現により、男を軽くはぐらかす歌となっている。『伊勢』および『古今集』の「知る知らぬ…」のほうが本来の形と考えられるが、『大和』はあ

えて異なる歌を創作したのである。これが成功しているかとはともかく、『伊勢』とは異なる物語を『大和』は志向していることは確かであろう。

むすび

『伊勢物語』と『大和物語』、この二つの歌物語を取り上げる際、とかく我々はその優劣を論じがちである。簡潔にして含蓄のある表現、人間把握の深さ、などにおいて『大和』が『伊勢』に一步を譲っているのは確かではある。『伊勢』の誤読や引用の不手際とおぼしい箇所も散見される。それでもなお、『伊勢』を強く意識しつつ語り直し、独自の展開を試みている点は評価すべきである。『大和』は『伊勢』とは異なる、業平や二条後の相貌を提示している。もう一つの在中将の物語、別伝を『大和』は創造し、語ろうとする。世間に流布していた物語や歌語りをそのまま取り込んでいくわけではない。そして和歌を媒介にして拡がって行く多様な人間関係、恋愛の諸相を描くことに関心がある。かかる『大和』の語りの方針について考えてみたのである。

注

(一)『伊勢物語』と『大和物語』の関係については、森本茂「在中将諸段の

- 構成―第一六〇段―第一六六段』『大和物語の交渉的研究』（平成二年、和泉書院）、柳田忠則「大和物語における在原業平関係章段について―大和物語の創作方法―在中将関係の章段を中心にして―』『大和物語の研究』（平成六年、翰林書房）、菊地靖彦「在中将章段をめぐって』『伊勢物語・大和物語論攷』（平成十二年、鼎書房）、妹尾好信「在中将関連章段の成立と『伊勢物語』』『平安朝歌物語の研究 大和物語篇』（平成十二年、笠間書院）、猪平直人「大和物語―在中将章段考―」「在中将―像の再検討―」（『文芸研究』平成十三年三月）など多くの論がある。
- (2) 仁平道明『伊勢物語』二十三段と李白「長干行」『和漢比較文学論考』（平成十二年、武蔵野書院）
- (3) 男が新たな妻を儲けるが、もとの妻の詠歌に感動して、夫婦関係が修復されるという話柄は、『大和』の好むものだったようで、他に百五十七段・百五十八段などがある。
- (4) 在次君については、福井貞助「在原滋春―伊勢物語形成との関係について―』『伊勢物語生成論』（昭和四十年、有精堂）、伊藤一男「在次滋春の物語」（『語学文学』平成十六年三月）参照。
- (5) 「梁殿内侍」「大和物語の人々」（昭和五十四年、笠間書院）
- (6) 「梁殿内侍をめぐって―『大和』から『伊勢』古注、そして『古今』注へ―」（『三重大学日本語学』平成十三年六月）
- (7) 片桐洋一『鑑賞日本古典文学 伊勢物語・大和物語』（昭和五十年、角川書店）および注（1）猪平論文が、詠者を二条后とする。
- (8) 注（1）猪平論文
- (9) 注（1）猪平論文
- (10) 『大和物語』の「歌語り性」「歌語り」と「歌物語」（昭和五十一年、桜楓社）
- (11) 拙稿「伊勢物語の終焉」（『国語と国文学』平成三十年五月）

*本文の引用は、『伊勢物語』は、大井田晴彦『伊勢物語 現代語訳・索引 付』（令和元年、三弥井書店）、『大和物語』は、高橋正治『新編日本古典文学全集十二 竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』（平成六年、

小学館）により、適宜表記を改めた。

キーワード：伊勢物語、大和物語、在原業平、二条后

Abstract

Isemonogatari and Yamatomonogatari

Haruhiko Oida

Even though Isemonogatari and Yamatomonogatari are works of the same period, their characteristics are very different. Isemonogatari depicts the life of a man after Ariwara no Narihira, his real name is not revealed. In Yamatomonogatari, there is no hero, many poets appear, they are introduced by their real names.

Several chapters of Yamatomonogatari are based on Isemonogatari. For example, Comparing chapter 23 of Isemonogatari and 149 of Yamatomonogatari, Yamatomonogatari has been evaluated as inferior to Isemonogatari.

This paper focuses on chapters 160–166, which Narihira appears. In these chapters, romance in the palace is an important topic. Romance of Saigu, downward to Azuma, friendship of men, these topics are not covered. Yamatomonogatari doesn't imitate Isemonogatari, modified in various ways. In Yamatomonogatari, Nizyou no Kisaki (Takaiko)'s character is changed as an aggressive woman in love. The empathy of Narihira is emphasized by the characters such as Somedono no Naishi and Ben no Miyasundokoro. Narihira died alone in Isemonogatari. In contrast, his death was mourned by many women. Yamatomonogatari tries to create new stories while being influenced by Isemonogatari.

Keywords: Isemonogatari, Yamatomonogatari, Ariwara no Narihira, Nizyou no Kisaki